月刊ポニーリーグ

PONY　PROTECT OUR NATION'S YOUTH

東広島　全国切符

初の夢舞台高島代表の信念「自分の力を出す」

3チームが出場する関メディ学院

初の全国切符をつかんだ東広島

関メディ狙う初出場初優勝

A、B、C3チームで偉業に挑む

今季から新規加盟した関メディ学院が、その実力を遺憾なく発揮した。2、3年生の部員で構成した4チームがエントリー。うち、A～Cの3チームが夏の全日本選手権出場を勝ち取った。

「リーグ戦形式だったことで、選手たちは相当な出場機会を得ることができました。3年生は全員が出場できましたし、2年生は他チームも含めた3年生を相手に必死に戦うことができた。貴重な経験を積ませていただけたと思います」

Aチームの指揮を執った井戸伸年監督は、実りある大会をそう振り返った。各チームが全力プレーに徹した中、特に目を引いたのがBで主将を務めた三木蓮太。同監督が「チームを引っ張る姿勢が素晴らしかった」と評したように、技術、メンタルともに大きな成長を遂げた。

「子供たちからは初出場初優勝を、という声が聞こえてきています。その思いをサポートしていきます」

開幕までの残り3週間足らずでもチーム内競争を続け、メンバーの入れ替えも行う構え。関メディ学院の総力を結集して、偉業に挑む。

6月号　第49回全日本選手権大会関西地区予選（スポニチ後援）は4月22日から6月3日まで行われ、中四国では東広島が初の本大会出場を決めた。東海近畿からは今季から新加盟した関メディ学院A、B、Cの3チームが全国切符をつかんだ。

「パルクール」導入で数値に表れる確かな成長

全6戦で58得点の猛攻

伊藤浩也監督が率いる東広島が着実な成長を遂げ、初の全国大会出場を決めた。

昨季から公式戦に参加して今季が2年目。オリックスや大リーグのナショナルズなどでトレーナーを務めた高島誠代表のイズムが浸透し、中四国の予選リーグを4戦全勝で突破した。同代表はナインの現状を称えつつ、輝ける未来を見据えた。

「チームとしては良い結果が出ましたが、選手たちにはここで満足してほしくありません」

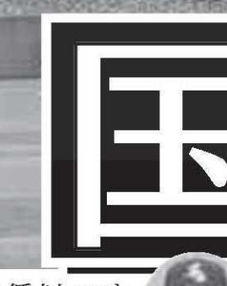
決勝トーナメントでは高松LTSJr.に大勝し、全日本選手権のキップをつかんだ。決勝までの6試合で58得点。岩井郷、小川蓮、伊藤大河、田渕川真朋、青山修己の5選手が本塁打を放った。

守りでは伊藤＝写真左＝―青山＝同右＝の強力バッテリーが軸となった。エース右腕の伊藤は3試合で勝利投手に。昨年までは制球に苦しむ場面もあったが、股関節の外旋に徹底して取り組んだことで柔軟性が増し、球速も含めたパフォーマンスが見違えるように上がった。

独自のメソッドが、最大の強みだ。練習時間は土日でも3時間。選手たちの集中力は増し、長時間の練習を回避することで消耗を防ぎ、体づくりにも効果をもたらす。さらに、野球界ではほとんど見かけない「パルクール」を導入。鉄パイプの上をバランスよく歩くことで、リスクマネジメントが自然と備わり、体をうまく動かせるすべを手にしている。

試合での結果だけでなく、各選手の成長ははっきりと数値に表れている。助走をつけて送球するプルダウンはチーム平均で20キロもアップ。球速、打球スピードも同じく10キロ以上アップしている。しかも打球速度は低反発か木製バットを使用して測定しているため、通常の金属バットなら20キロを超える数値が期待できる。

「全国大会ということでスイッチが入りすぎたり、逆に萎縮してもダメ。大切なのは、自分の出せる力を出すこと。全国大会での経験は必ず将来につながる。目先の勝利よりも、その部分を大切にしてほしい」

高島代表の指導モットーは目先の1勝よりも、長く野球に携われる土台づくり。ポニーリーグの理念を象徴する東広島の戦いぶりに注目だ。

伊藤―青山の強力バッテリーが軸